

氏 名	衛藤 隆弘 (エフ トロ)		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲第 26 号		
学位授与日	平成 22 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	ポスター表現と印刷の関係についての考察		
審査委員	主査 教授	近 藤 秀 實	
	副査 教授	森 下 清 子	
	副査 教授	佐 藤 晃 一	
	副査 武蔵野美術大学 名誉教授	勝 井 三 雄	

## 内 容 の 要 旨

近年、グラフィックデザイナーの脱領域的な仕事に関心が集まる一方で、本来グラフィックデザインの専門領域であった印刷物自体のデザインや、印刷表現について語られる機会が少なくなった。社会への貢献度などの尺度でデザイナーの仕事を評価する傾向が強まり、デザインした結果どう状況が改善されたかが注目されている。

このこと自体は健全な状況だが、「表現」が技術やマテリアルとの関係の中で語られない状況が続くことは問題である。この場合の技術とは印刷技術であり、マテリアルとは印刷インキや印刷用紙などである。日本のグラフィックデザインの発展と独自性は、「表現」を技術・マテリアルとの関係において構想したデザイナーが支えてきたのではなかったのだろうか。

「表現」と技術の関係について、シルクスクリーン印刷で刷られたポスターを対象に論じることが本研究の目的である。ポスターを扱う理由は、デザイナーの想像力と印刷技術の限界との相克が行われた場となっていたからだ。なぜなら、ポスターは多彩な印刷用紙を選ぶことが可能で、金や銀、蛍光色などの特色を使うことができる。また、どの版種でも刷られており、選択された版種とそのポスターの表現との間になんらかの関係が見いだせるはずである。

ただ、本論はシルクスクリーンにだけ特化して論じるわけではない。それでは現代の制作者が本論を書くことの意義が薄い。そこで第 4 章においてインクジェットプリントについて取り上げる。この新しい印刷技術はこれまでの「表現」と技術の関係を大きく揺るがしている。インクジェットは便利であると同時に、シルクスクリーンのような版表現ができない。そのために「表現」とインクジェットをどう関係づけるかについては、これまでの印刷表現を参考にするにはできない。このことが現代の制作者である私にとって重要

な問題として浮上してきた。

まず第1章ではシルクスクリーンが用いられ始める50年代のポスターを分析する。特に河野鷹思の戦前と戦後の作風の変化に、シルクスクリーンが与えた影響を考察する。戦前はオフセット印刷を用いて、戦後はシルクスクリーンを用いてポスターを制作したが、印刷の版種の変化とその表現には明らかな関係がみられる。このことについて考察する。

第2章では亀倉雄策がどのように構成主義を受容していったのかについて論じる。亀倉は構成主義を吸収することで日本のポスターの近代化に貢献し、その質の高さを世界に証明した。亀倉は構成主義を受容した50年代から60年代にかけて、シルクスクリーンによるポスターを多数制作している。凸版印刷や平版で刷られることが多かった欧米の構成主義的ポスターを、孔版であるシルクスクリーンにより実践することになるが、この版種の違いが表現に与えた影響について考察する。

第3章では、1960年代後半のシルクスクリーンの役割について論じる。この章ではシルクスクリーンがポスターに造形的な飛躍をもたらしただけではなく、ある共同体の人間をまとめあげた点に着目した。ポスターがコミュニティの生成に貢献した点が興味深い。

第4章では、現代のポスターとインクジェットプリントをめぐる状況の問題点と可能性について論じる。膨大な映像表現が配信され刹那的に消費されてゆく現代においては、コミュニティをまとめあげるシンボル性や、時代を超えて出来事を語り継ぐ記憶装置としてのポスターの機能はかけがえのないものである。即時性の中ではなく一定の時間の長さの中での現象としてポスターを捉えることで、潜在的な可能性を示したい。

全体を通して印刷技術と「表現」の関係について論じているのは、ポスター表現が印刷技術を足がかりにして飛躍するということを示したいからだ。河野や亀倉ら当時のグラフィックデザイナーは、まだ未熟なシルクスクリーンを表現の手段へと高め、新しい時代の瑞々しい表現を生み出した。印刷の不自由さと制限は可能性の宝庫であった。

別の言い方をすれば、彼らの表現の飛躍には、飛躍を支える大地が存在し、その大地こそ印刷技術でありマテリアルだったと言えないだろうか。バレエなどを例に挙げるとわかりやすいが、踏みしめる固い大地がなければ高い跳躍は実現できない。跳躍を阻むはずの重力でさえ、それなしには跳躍に緊張感や切実感が生まれない。無重力空間では一步前進することもままならないはずだ。ある制限から解放されることで不自由になるという逆説的状况は起こりうる。重力によって常に大地にへばりついているという現実があるからこそ、そこからの飛躍や解放として跳躍という行為が意義深いものになる。河野や亀倉にとっても不自由なシルクスクリーンは一見すると表現を阻むものだったかもしれないが、彼らはその制限を足がかりに独自の「表現」を生み出したのだ。